2022年3月13日 川越教会

丸山　勉

わたしの記念日

［マルコによる福音書14章10～11、18～26節]

十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

[１]　「記念」ということ

来月4/17が今年の復活祭、イースターになり、現在は主イエスの受難を覚える「レント」と言われる時を過ごしています。しばらくは主イエスの受難に思いを馳せる時を持たせて頂きたいと思いますが、考えてみると、教会という所は、受難と十字架、また復活ということ抜きには成立しないのですよね。教会の生命線です。今日は主イエスの「最後の晩餐」の場面の箇所からご一緒に聞きたいと思います。

「最後の晩餐」については、表現は違っていても、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネそれぞれの福音書に記されています。今日のマルコの記述では出てきていないのですが、この最後の晩餐で印象的なイエス様の言葉の一つは、「これをわたしの記念として行いなさい」というものです。「わたしの記念」。毎月第一主日におこなっています「主の晩餐式」とは、正に、主がこれを行えとおっしゃる言葉に従って欠かさず行う「記念日」と言って良いかと思います。「記念」とは何でしょうか。一言で言うならば、過去の出来事を現在のこととして捉えることだと思います。「思い出」じゃないのです。そのことが、現在を掘り下げることになる。漫然と時の流れに流されるのではなくて、そこで楔を打つのですね。思いを深める。「記念」という漢字も、‟念じて記録する”というような漢字になっていますね。

あなたにとっての大きな記念日というのはいつですか？「〇月〇日」と、すぐに言える日があるのではないでしょうか。色んな記念日があっていいし、自分にとってそういう「記念日」が多い人ほど人生を豊かに生きていることなのかな、と最近思います。そしてそういう人は、他者の記念日にもよく気が付く人のようにも思います。私はこの3月の頭、母を失って一年が経ちましたけれども、思いがけず、同じ年代のある他教会の友人の男性（彼はミュージシャンでもあります）から、もう一年が経たれたのですね。お父様の方はいかがですか？というメールを頂き、ちょっとウルウルしてしまいました。誕生日とか結婚記念日とか、そういう、まぁ明るい記念日だけではなく、悲しみを伴うような記念日というのも、また、人生にとって深い意味を与えてくれるものなのではないでしょうか。それを共有出来るということは有難い事です。…私はその意味でも、この主の晩餐の時を「わたしの記念」として行えと言われた言葉は、これが、あなたにとっての大事な記念日にして欲しい、という主の願い、祈りがあるように思えてなりません。

[２]　 過越しと「新しい契約」

前置きが長くなってしまい、失礼致しました。さて、今日の箇所の中で、イエスは弟子たち皆をこの食卓に招き、自らこれを行おうとされています。この晩餐式は、古代イスラエルの民が、神様の力強い手によってエジプトの支配下から自由になったその事を記念する「過越の食事」に沿ったものでありました。脱出と解放。それはひとえに神の憐みの出来事です。それを年毎に記念し、その際は必ず犠牲が献げられていたのです。1歳の雄羊が神への供え物として殺される。そのことで、イスラエルの不信仰と罪が赦されるという、旧約聖書の律法に基づくものです。今日の箇所の並行記事のルカ福音書では、主は「わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた」（22:15）と記されています。主イエス様はもうご自身が過越の「屠られる小羊」となることを覚悟されていたのです。ですから「これはわたしのからだ・これはわたしの血」と言われて、自らを神への供え物として差し出される、その思いは定まっていたのです。

さて、弟子の一人、ユダもそこに居ました。14:10に「十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして」とありました。「イエスを引き渡そうとして」と。おかしな言葉だなと思います。ユダが売り渡す？主イエスはユダのものなのですか？―Noですよね。しかし、その機会を狙っていたと。これが私たちにも関わってくる大きな勘違い、大きな罪だと思いました。恐らくユダにとって、この時のイエスは自分が描いていた救い主（メシア）像からどんどん外れて行って、失望してしまっていたのです。そうして、イエスを捨てるのです。しかしそれは逆に言うならば、自分の方を絶対化することではないでしょうか？しかし、自分を絶対化するということは、本当はあってはならないのです。何故なら、私たちは神ではありませんから。神になった自分に愛想が尽きたらどうなりますか？…ユダのように首を括ってしまうことになりかねないのです。ですからイエス様は悲しみながらおっしゃったのです。「人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」（マルコ14:21）。これは主イエスの愛ゆえの嘆きの言葉ではないでしょうか。

　この晩餐の時、「一同が食事をしておられる時」とか、「彼らは皆その杯から飲んだ」とか記されています。12弟子すべて、ユダも主イエス・神の独り子の「招き」の中に間違いなく置かれていたのです！ 実はこれが、旧約聖書に基づく「過越の食事」とこの時の主の晩餐との大きな相違です。

旧約聖書すなわち旧い方の契約というのは、ある意味、本来の意味の契約なのです。どういうことかと言うと、出エジプト記の24章にこうあります。「彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うと、モーセは血を取り、民に振りかけて行った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれる契約の血である」（出エジ24:7-8）。契約。これは通常、相互責任です。この場合、イスラエルの民が律法を守らなければ、契約は、契約でなくなります。

しかし、主イエスはこの時、杯を取って何と言われたのか。―「彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」と記しています。―「多くの人のため」というのは「すべての人のため」と同義語です。これは驚くべきことに、人間の不信仰や罪があっても崩れることがない、一方的な契約なのです。これは本質的には「契約」というより、「愛」です。愛そのものです。これをもうこの時に主イエスは宣言してしまいました。あなたがたのためにわたしは神の小羊となる。このわたしという生け贄を神は受け入れて下さる。そのようにしてあなたと神との結びつきは、サタンが全力で阻止しようとしても、大丈夫、もうそのサタンの力は滅ぼされるのだ、と。十字架というのは実は敗北ではない、神の勝利なのだ！と言いたいのではないのでしょうか。

このイエスの体、すなわち裂かれた肉体と、十字架で流された犠牲の血、これが、「新しい契約」の実体なのです。のちに使徒パウロは、この一歩的で制限のない愛についてこう記しました。―「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」（ローマ5:8）。

[３] 主の晩餐―何にも勝る記念日

主イエス様は最後の最後まで、ユダのことをおもんぱかっていたと言うことが分かります。機会があったら週報にも記しました犬養道子氏の「新約聖書物語」をお読み下さい。押しつけがましく無く、詩的感覚もあって素晴しい書物だと思います。その本でも取り上げられているヨハネ福音書では、晩餐の場面でユダが皆に裏切り者だと指摘されたとは書かれてありません。その本を読んでも思いました。イエス様はユダの心に、「そっちに行くな、そっちに行くな、わたしのもとに留まれ」と働きかけていたと思います。けれども、神か自分か、神に委ねるか神を捨てるか、それはその人が選ぶしかない。…けれども私は信じます。神を捨て、最終的に自分を選び、絶望してしまったユダのためにも主は十字架上で祈られたのだと。「父よ、彼らを赦し給え。彼らは何をしているのか分からないのです」（ルカ23:34）。…私たちとユダと、一体どこ違うのでしょうか。私は違わないと思うのです。「まさかわたしのことでは」と私たちも言うのではないでしょうか。自分で自分を保つ確かさなど、人には無いのですね。ユダの存在、そしてそれに真剣に関わる主イエスの物語が福音書の中にあるのは慰めでもあります。

最後の晩餐は、究極の食卓でした。神の独り子がホストになって、自分を与える食卓を整えたのです。―「あなたは、わたしの愛を食して欲しい。わたしの愛で、愛だけで生きて行って欲しい。これがあればもう何も要らないというものを手にして欲しい。それがあなたの命を支えるものになる。そしてその命は、死んだ後も、神がしっかりとあなたを抱いてくれる命である」。―この晩餐を、主は今から後、私が再び来る時まで、「記念として行いなさい」と言われました。何にも勝る「わたしの記念日」とさせて頂きたいと思います。お祈り致します。

主よ、今日の礼拝をご一緒に守ることが出来て感謝致します。あなたが残して下さったものの大きさと、その愛の深さを思います。この愛は、私たちの不信仰を貫き、ユダに代表される人間の闇の深さを明らかにしながらも、それを覆って私たちをあなたのものとして抱き留めて下さる愛であることを教えられます。主イエスの十字架と復活こそ、私を生かすまことの「記念」です。いつもこの記念に立ち帰ることが出来ますように。そして、暗い顔ではなく、あなたを讃美しながら、この人生を歩ませて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。